橋の下世界音楽祭実行委員会

（タートルアイランド×マイクロアクション×火付けぬ組）

調査団体名　：　橋の下世界音楽祭実行委員会
設立年　：　2012年
団体URL　：　http://soulbeatasia.com/
活動拠点　：　橋ノ下舎（豊田市西町・コンテンツニシマチ内）
取材日　：　2017年 12月 13日

団体代表者名　：　永山愛樹
対応してくれた人の名前　：　永山愛樹

調査員　：　近藤朗、服部朋悦、内田雅之、洲崎燈子
レポート作成者　：　洲崎燈子

活動内容

2012年から1年に1回、矢作川河川敷の千石公園（豊田市千石町）、豊田大橋の下を中心に「橋の下世界音楽祭」を開催している。この音楽祭は（2014～17年は）5月の週末の3日間開催され、国内外の多様なジャンルのアーティストがパフォーマンスやライブ、ワークショップ等を行う。ステージを3つ組むが、メインステージは河川敷の竹を自分たちで伐り出して作っている。会場には大小のインスタレーションが並び、日本全国から集まった出店者たちが軒を連ねる。入場料を取らない投げ銭形式（＋協賛金）で運営。スタッフは15～20人で、永山さんが率いるバンド「タートルアイランド」とタートルアイランドのマネジメントをしているマイクロアクション（横浜）のメンバー、地元住民らで構成されている。

この音楽祭を始めたきっかけ

2011年の東日本大震災の後、西日本の音楽仲間たちで度々被災地を訪れた。物資を運んで往復したり、ずっと滞在する人もいたが、自分たちでやれることには限界があるし、自分の家賃を払うのもきつい中でボランティアをするのは…と一度引き揚げた。この時、「一度自分たちの生活を見つめ直そう。自分たちの原点って何？」と考えた。
今、身近な音楽も、食も生活スタイルもほぼ西洋が基準。東洋のものを見直そうと考えた。西洋の基準一辺倒にするのは自分たちに合わないし、無理があるし、癪。西洋の音楽は合理的だが、東洋の音楽はのびのびして面白く、劣等感を持つ必要はない。自分たちの属する東洋、アジアを身近に感じられる祭りをつくろうと考えた。

矢作川の川辺を開催場所にした理由

この場所は子どもの頃から音楽の練習やBBQをやったりする身近な場所で、いつかお祭りをやりたいと思っていた。川に来る人はさまざまで、走る人や読書する人、休憩する営業マン、夜は不良少年たちが来たりもする。一種の逃げ場で、まちなかにはそういう場所が一ヶ所は必要。川は誰でも行けて、楽しめる場所。また、何か失敗しても「流せる」ので、お祭りにもってこいの場所。昔から川辺では文化が生まれてきた。

キャッチフレーズ

皆でつくる、自分らの祭り

会のモットー（何を大切にしているか）

この音楽祭は野外フェスではなく、1年に1度自分たちを浄化し、地固めするための手づくりの祭り。矢作川で、普段の生活ではできない「実験」をしている。

橋ノ下舎でライブを行う永山さん（2016.9.15）

設立から現在に至るまで変化したこと

出店者やお客さんが変わった。このお祭りは皆でつくると言う意識が浸透し、提案したり自分たちで考え、自治し出した。最初は風、土埃や虫を何とかしろと言ってきた人もいた。今年は一ヶ所しかない水場の排水状況を改善してくれた人がいた。今は全店舗が電気を自前で何とかしている（出店者が充電器を持参したり、使わずすむよう工夫したり）。こんなイベントは世界でここだけではないか。

連携している団体・専門家・自治体など

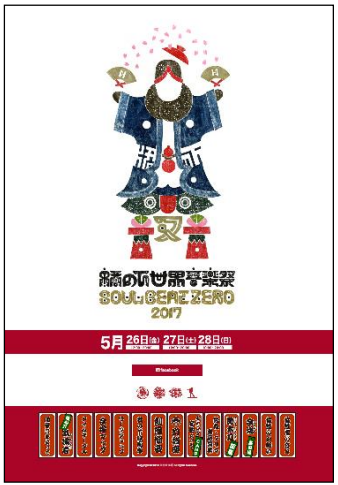
慧通信技術工業(株)（神戸）…約一億円のパーソナルエナジー（太陽光発電によるオフグリッド独立電源システム）を無償で提供。
RA-energydesign（東京）…ソーラー音響。
山形の蔵王龍岩祭実行委員会…メインステージの音響機材提供。
(株)豊田スタジアム…備品の貸与。
豊田文化振興財団…書類申請。
100～200人のボランティアスタッフ…口コミ、飛び込みで来る人も多い。Tシャツと賄いを提供するが、いらないという人も。
この音楽祭の趣旨に賛同し、多くの人や組織が手弁当でサポートしてくれている。ノーギャラ、旅費・食費・宿泊費のみで来てもらったアーティストのイベントに、ノーギャラで出演したりしている。また、年間を通じ会場の千石公園で河畔林整備をしているNPO矢作川森林塾には敬意を表して、可能な範囲で作業のお手伝いを行っている。

現在直面している課題

・お金。日本中のフェス関係者が、この規模のフェスでどうやったら儲かるのか聞きに来るが、誰も儲かっていない。3年前まで毎年300万円位の赤字が出て、CDやライブの売上で補填していた。今はトントン、持ち出したものが賄える程度。気持ちと気合いだけでやっている。
・トイレ。いくらあっても足りない。仮設を増やすしかないが、運搬等が大変。
・車の動線。子どもが心配。駐車場を会場外にできればいいのだが。

今後やってみたいこと

・もっと祭りの内容を考えたい。だんだんその時間がなくなってきている。参加型の企画をもっと増やしたい。
・今はメインステージの建て込み（舞台づくり）をできる人が限られているので大変。ワークショップなどを行い、舞台づくり、設営、撤去ができる人を増やしたい。
・川をもうちょっと使いたい。対岸と行き来できる、筏などを使った渡しができないだろうか。3日間でねぶたのような大きな山車をつくり、アジア諸国の書家に字を書いてもらって、最後に川の上で燃やしてみたい。
・子どもたちだけで運営するエリアをつくりたい。公募をかけてマネジメントや音響も子どもたちにやってもらう。ある年に参加した子が、翌年参加した子にやり方を教えられるといい。
・今年はミズベリング（行政による水辺空間活性化プロジェクト）の一環として開催したが、今後もっと関われるといい。



公式サイト2017年トップページ

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞この音楽祭をいつまで続けたいと思っていますか？
＜答え＞
最初は勢いでやっていたが6年目になり、歳も取るし、生活もあるし、準備に半年かかるしと大変。でも一応、死ぬまで続けたい。やらない年があってもいいし、名前を変えて小さく開催してもいいし、地元中心の祭りにしてもいい。でも、マンネリになったらもうやらない。実験ができなくなったら終わり。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞この場所、橋ノ下舎（はしのしたセンター）について教えてください。
＜答え＞以前は土橋でお店をやっていて、祭りの前に作業したり泊まり込んだりしていた。そこがなくなり、昨年改築されたこの建物（コンテンツニシマチ）に来ることになった。皆でカンパし合い、内装などの工事もやった。祭りは年1回だけなので、持続的に腰を据えて続けることをここでやりたい。仲間たちの避難所、駆け込み寺、寺子屋、公民館のような存在。酒などの売り上げを運営費に充てている。ライブの他にアトリエ、ギャラリー、寄席、ミニシアターなどとしても使われている。

取材者の感想

矢作川の川辺の、それまで誰も思いもよらなかった新しい魅力を引き出してくれた、妖しくも楽しい「橋の下世界音楽祭」。永山さんの音楽仲間を含め、この音楽祭が初めて矢作川を見るきっかけになったという人がとても多いそうです。このイベントが野外フェスではなく、「自分らのお祭り」として手づくりされていたということに感銘を受けました。永山さんの、「音楽も絵も、芸能もお祭りも、本質的にはこうなってほしい、こうあってほしいという“祈り”だ」という言葉が心に残りました。また、このお祭りが実験の場であるというお話になったとき、取材者の近藤さんから「全てのものが限られている、という意味では、社会も地球も実験場だよね。」という言葉が出て、なるほどと膝を打ちました。ひょっとして世界の縮図なのかもしれない、この破天荒で最高に魅力的なお祭りから、今後も目が離せません。

橋の下世界音楽祭アルバム